

目次

【下巻】

随筆 日記 「雑草の息吹き」 3

随筆 「佐渡金山の町の人々」 (平成二年八月十五日) 137

書簡集 139

クラス会、女の戦場、石扣町の隣人 147

想出の技師たち 157

海鳴会 165

東京相川会 172

あしがき 177

随筆 平成編 179

短歌 225 / 書簡 挨拶文 253 / 掲載記事 277 / 写真 307

田中志津年譜 317

流転の人生の暁に——作家 田中志津 …………… 田中行明 347

流転の人生の暁に——作家 田中志津

一九一七年、ロシア革命の年に新潟県小千谷市に官吏の四人姉弟の長女として田中志津は生を受けた。父方の先祖は、小千谷に十一代続いた縮問屋商「増善」であった。

志津は幼少の頃より感受性が人一倍強かった。隣人が弾く、生まれて初めて聞いたバイオリンの音色に、魂を揺さぶられるような衝撃的な感動を覚えたという。小学生の時には綴り方が好きで、自分の作品が謄写版などに刷られてクラスでよく発表されたという。父親は官職の傍ら趣味で小説を書いていたので、志津も父の影響が多少あったのであろうか？

父の転勤で生まれ故郷小千谷から、新潟市・佐渡島へと移り住み、女学校を卒業後、女性事務員第一号として、三菱鉱業（株）佐渡鉱山に七年間勤務した。志津は「青春時代を佐渡で過ごした時代が人生の中で最も輝いていた」と述懐する。二十歳の時に最愛の父親を佐渡で一晚にして亡くし、精神的支柱を失い、青春の蹉跌を痛感したという。

佐渡で首席属を務めていた父増川兵八は、公務で佐渡各地を訪問し、その活動記録が新聞に報道されることが日常だったという。また父の依頼で、自分が来賓で挨拶する原稿を長女志津に確認させ、間違いなく挨拶できているか家でよく練習したという。父と志津の関係は、幼少の頃より深い親子愛で結ばれていた。志津は父を尊敬し、父は志津の成長を温かく見つめつつ、厳しい教育姿勢で接していたという。そんな父親を亡くした志津は、その時に人生で最大級の悲しみを味わった。

その後、三菱鉱業（株）佐渡鉱山を退職して、結婚の為に上京する。この結婚が志津の人生に多大な影響を与えた。今

迄平穏な生活で暮してきた人生から一転して、残酷で波乱万丈な生活が待ち受けていたのである。夫は大学の商学部と法学部を卒業したエリートであった。特待生でもあり、授業料を免除された優秀な男だったという。二つの大学を卒業する程学問には熱心であった。大手企業の工場長まで登りつめたが、一転自分で起業してから転落の人生が雪崩の如く始まった。夫は事業の失敗や精神的揺らぎを酒へと逃避して行ったのであろう。

家族は長年にわたり、夫の酒に溺れた酒乱生活におののき、翻弄され、苦しまされ続けてきた。志津は「地獄絵さながらの日常だった」と振り返る。そうした逆境の不条理な負の生活の中で、志津は文学に目覚めた。夫の眼を盗み、原稿用紙の枠目を埋めてゆくことが、ずたずたに破壊された心の傷を埋めてゆく唯一の生きがいでもあり、生きる道だったのであろうか？

新宿時代に夫の許可を得て、文学の同人誌に入会した。夫は妻に紀伊国屋で広辞苑を求め与えた。そんな思いやりや理解力のある一面も兼ね備えていた。しかし夫との生活の大半は、結婚当初と夫の晩年を除いては、波乱万丈な生活が重く支配していた。

同人誌では、「信濃川」のもとになる「銀杏返しの女」を発表。また同人たちの論評まで手掛け、徐々に文学の力を身につけてゆき、同人の仲間たちからも注目される存在に成長していった。

「信濃川」は母から聞いた明治という舞台で一人の女が生きた半生の物語を、信濃川を背景に描いた作品である。「信濃川」の帯は、直木賞受賞作家和田芳恵によって「淵によどみ、野へあふれ、流れてやまぬ女の河。雪ふかい北越の町と、明治という時代を背景に、作者は一人のつましい女の半生を、惜しめない感傷の流露のなかで、力をこめて描いた。初心とも古風とも見る人はあろうが、小説とは本来こういうものなのだ、私は思っている。」と書かれた。

また「雑草の息吹き」という随筆日記を自分でタイプ印刷して、四谷の製本所に持ち込み三十冊程製本したという。やり場のない生活に苦しみ、もがき、苦渋の中から生まれた作品と言ってよからう。志津は文学に逃避したのだろうか？否、

苦難の中で生活と戦い自己を強固なものへと構築してゆくためのツールとして文学があったのではあるまいか。この志津の持つ底知れぬ力強さは一体どこから生まれてくるのだろうか？勿論本人の資質も核として存在することは言うまでもない。だが、私は詰まる所その根源は、志津の原風景である故郷の土壌・風土・気候から生まれてくるのではなからうかと推察する。雪深い小千谷で生まれ育ち、鉛色の鈍重な空の季節を数か月も耐え忍び、春の訪れとともに雪解けの山河から明日への喜びを享受してきた。佐渡時代には、荒れる日本海の高鳴りの音を身近で聞き、四季折々の大自然の中で生活を満喫した。一方戦争というおぞましく悲しくて痛ましい体験も味わった。また、青春の多感な時代に佐渡金山という隆盛から凋落に向かう一時期を経験した。その中で、佐渡金山の現場で働く労働者たちの生き様を間近にし、また、全国から集まったエリートたちとの出会い、佐渡の自然・文化・風俗及び佐渡金山の歴史にも直に触れることが出来た。

そうした時代との遭遇が、志津を有形無形のクロスオーバーした形で成長させていった。つまり、それらのグローバルな経験が志津の体の中にカオスとして自然に融合され、血となり肉となって「文学」の形態として昇華されているのだらう。

「雑草の息吹き」はその後、戯曲家郷田恵によりNHKで「今日の佳き日は」として全国放送された。また志津は、「遠い海鳴りの町」「冬吠え」「佐渡金山を彩った人々」など、遅筆ながらも着実に世の中に作品を生み出し続けてきた。この頃には、自分の中で既にライフワークとしての文学が確立していたと言えよう。

私は、来年一月二十日に九十六歳になる作家田中志津の一生を回想する時、全集「田中志津全作品集」が志津の総括として昇華された金字塔のような作品であると考える。一連の志津の作品は、純文学であり、その姿勢は一貫している。そして、時代考証的役割とまた、時代の裏面史的側面をも合わせ持つ、貴重な文学作品と位置付けることができると云えよう。まさに現代社会に於いて稀有な存在である。

田中志津の文学碑が、佐渡金山と新潟県小千谷の船岡公園にいぶし銀のように輝いて建立されている。佐渡金銀山は、

現在世界文化遺産に暫定登録されている。後世に志津の名前と足跡を残すのに、この二つの文学碑は大きな役割を果たすであろう。

既刊小説及び昭和時代・平成時代の随筆、そして短歌を収載した全集。

亡くなった詩人でもある田中佐知から「おかあさんの短歌は短歌ではない。そのままのもの」と批判されながらも、志津は難くなく短歌の筆を止めない芯の強さを感じる。

大正・昭和・平成を真摯に生き抜き、昨年の3・11の千年に一度の東日本大震災を福島県いわき市の入院先病院で経験して、命からがら東京に避難生活を余儀なくされている。

振り返ってみれば、志津は、小千谷を皮切りに新潟市内・佐渡相川・東京の目黒・世田谷・そして四十三年間こよなく愛し続けて住んだ新宿を経て、最愛の娘保子（佐知）と埼玉県所沢市に十一年有余在住していた。その後、癌で娘を五十九歳十か月で亡くし、高齢ゆえ所沢で一人で生活するのも困難なこともあり、次男行明の住む福島県いわき市に移り住んだ。原発事故が無ければ晩年の地は、多分いわき市であったであろう。しかし現在は東京都中野区に住民票を移している。人生の中で、故郷を離れず一生その土地に暮らす人達も大勢いる。

志津は激動の時代を生き続けている中で、今も随筆や短歌にチャレンジし続ける「作家魂」というものには、敬服してやまない。志津の根本思想は一貫して真理の追究であり、その洞察力の卓越さは天性のようにも見え、目を見張るものがある。どんな環境下におかれても、真摯に生きる姿勢は不変である。また、正義感・責任感が強く、白黒・善悪が明白であり、立ちはだかる困難からは、好むと好まざるとに拘わらず決して逃げない。どんな局面においても真摯に事物と対峙して解決の糸口を自力で見つけ出す。信念はぶれないのである。不動の信念は一見頑固さにも通じるが、その底流には深い慈悲と思想が息づいている。

誰からもこよなく愛される人柄は、本人の資質も勿論あるが、積年の人生経験から培われてきたものであろうか。

両足大腿骨骨折でボルトが二本両足に埋め込まれ、脊椎管狭窄症・骨粗鬆症という病とも戦い、決して万全ではない体調の中で、こつこつと作品作りに取り組んでいる姿に大いに賛歌と拍手を送りたい。

生きることの辛さ・苦しさ・悲しさ・不条理さ・残酷さを充分に認識した上で、生きることの喜びや意義を同時に感じている。

志津は流転の人生の暁に今、荒波を乗り越えて、誇らしげに帆を高く揚げ、命の灯りを灯して力強く未知の大海に船出しようとしている。

平成二十四年十二月五日

田中行明